豊後多田氏に関する一考察

多田太郎吉
（会員・佐伯市黒沢区）

一　はじめに

私が、当初黒沢の多田氏という姓に疑問を持ったのはその多田姓の発生に係る伝説に、著しい作為性を感じたからでありました。

伝えによれば、

「さるほどに、惟治日州三河内へ退散の時、佐伯の内、黒沢と云う所にて、多田弥四郎が娘若狭という女、十八歳の時、惟治に出向う。惟治馬上より水を御所望あり。女、惟治をただ人にあらずと思い、新しき柄杓に水を汲んで馬上にささぐ。惟治悦喜して、我二度帰城あらば、志は賀すべし。もしもその儀なくとも、汝人に名を呼ばるる者になさんと宣い、三河内へ越山なり。をたかち山と云う所に暫し休侍りき。」（大友興廃記）

とあります。

又、別の伝えによれば、黒沢村で小憩した惟治公に、新しい柄杓で水を奉った百姓娘の若狭に、惟治公はその名を問い、父の名を聞いた。若狭の父弥四郎は、惟治公に暫く様子を見るため、船形に滞在をすすめ、黒沢村の百姓が食糧を運んで惟治公一行の世話をした。若狭は、惟治公の身の廻りの世話にあたり、父娘共に、惟治公の為に尽した。惟治公は出発にあたり、若狭にいたわりの言葉をかけ、世話をつくした弥四郎には「多田」の苗字を名乗ることを許した。多田の姓は、若狭が父の名を聞かれて「弥四郎と申します」と答えたのに、惟治公が姓は何と言うかとの再度の問いに「姓はありません。ただの弥四郎でございます。」と答えたことにちなむものといわれています。

ところが、これは話として、まことにうまく出来過ぎているようです。佐伯惟治公没後、新領守に対する対策として、多田弥四郎は、もと百姓であり、多田は新しく

賜った姓だとした方が無事であるからです。

ところで、多田姓の者が惟治公の側近に居りました。大友興廃記で、惟治公が竜護寺川原木戸の瀬で、魔法を使う話があります。その時魔法をかけた鷺を抱き取って来たのが、多田七郎兵衛尉であります。（栂牟礼城風雲録二十四頁）　この多田七郎兵衛尉は、栂牟礼城の攻防で、強弓の者として聞えて居ります。（同書九十一頁・四十五頁）

この様に重要な側近の多田氏の姓を、簡単に一介の百姓に与えるはずがありません。それに、多田七郎兵衛尉の名が、栂牟礼開城時に大友側に帰順したらしくも無くて、浪人して百姓になった人々の中にも無く、惟治公一行の中にも見当らないのは、どういうことなのでしょうか。恐らく、惟治公再起に備え、惟治公の密命により、多田一族は船形のあたりに潜み住んだと考えられます。

今一つの手懸りがあります。それは、娘の名が「若狭」という名ですが、これは如何に考えても、局やら御部屋様の名であって、百姓娘の名ではありません。多田氏は家臣ですから。惟治公は正室には出来ませんが、恐らく側室としていたのではないかと考えます。

二　多田氏と佐伯氏の関係

私は、多田氏と佐伯氏の間には、古い因縁があるものと考えて居ります。それは、遠く源平時代に遡ります。

寿永四年（一一八五）三月二十四日、平家一門を壇の浦に滅した源義経に対し、後白河法皇は政治的策動を施し、頼朝の勢力を押えるため、特に信任を施した。すなわち、頼朝の承認無しで、義経を左衛門少尉検非違使に任じ、兄弟の離間策を行なった。又、義経が平時忠の娘をめとったことも、頼朝の疑惑を招いた原因でしょう。

頼朝が、土佐房昌俊を義経の住む六波羅館に討手として差向け、義経がこれを返り討にした事件もあり、義経は、十月十八日、法皇から「頼朝追討の宣言」を得ます。

しかし、挙兵は意外に劣勢な勢力しか集まらず、この間に、頼朝は大軍を率いて鎌倉を進発します。義経は、正面衝突をさけなければならず、法皇に院宣を奏請して義経を九州の地頭に、叔父行家を四国の地頭に任命してもらい、十一月三日、静かに退京しました。義経に従った軍勢は約二百騎の小勢だったと言います。頼朝の政治性には、義経は手も足も出なかった訳です。

この義経の九州落ちの計画に、後白河法皇の命を受け

た緒方惟栄が参加していたことは重要です。十一月四日五日の両日は、義経一行にとっては戦に明け暮れた日々だったようで、先導と護衛にあたった惟栄の苦労が察せられます。

さて、この時の多田源氏の総領は、行綱だったようですが、彼の向背はどうだったかということです。それについては、吾妻鏡の文治元年十一月五日、池田望政について書かれた記事があります。池田望政は、美濃池田郡の郡司の家柄の子孫ですが、先祖は清和源氏との関係が生じておりました。そのような理由から摂津豊島に何時の頃からか邸閣を建て、美濃と摂津の領地を兼帯して居りました。この地は、摂津源氏の基盤でもあります。

池田望政は、源三位頼政が以仁王を奉じ挙兵した時、烏帽子親の頼政と行動を共にして、伊豆に配流となりました。このことから、源頼朝に近づくことができ、やがて測近として身を立てることになりました。

この望政が、摂津池田の町のはしばしに土手を築き、十一月五日、多田源氏と矢石を交えたことが、その吾妻鏡の記事にあります。してみれば、多田源氏は義経側に加わっていたものと思われます。

翌六日、義経軍は大物浦（尼崎市）から舟で豊後に向うのですが、突然の暴風雨のため、舟は覆没したり、流されたりで、軍勢は四散し、義経主従五人のみ漸く大阪府の和泉浦に漂着し、以後吉野山に入ることになるわけです。佐伯氏の祖、緒方惟栄の活躍も、これで史上から姿を消すわけですが、惟栄については、死亡説と生還説があって、現在でも定説を得て居りません。

大物浦から舟出した義経軍の一部の中には、豊後迄ようやくたどり着いた者もいたはずです。その中に、多田源氏の誰かが居たとしても不思議ではありません。

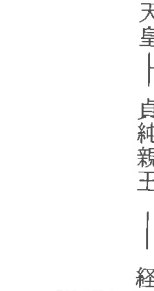
惟栄は、生還して佐伯荘に住んだという伝えがあります。このような伝えがあるのは、佐伯荘の佐伯三郎惟康が、緒方惟栄と気脈を通じ、豊後国内に於けることを引受けていたからであると考えられます。緒方惟栄と、佐伯惟康は『大分県の歴史』の著者渡辺澄夫氏によれば、従兄弟の関係にあります。

私は、以上のことから、佐伯氏と多田氏の関係を推定するのですが、これはあくまで状況証拠にしか過ぎませんが、これは、ほぼ正しいのではないかと考えます。

三　多田源氏について

多田源氏とは、清和源氏の流れで、本来は清和源氏の嫡流であり、摂津源氏とも言われます。

系図（その一）



通説としては、経基王は貞純親王の子とされていますが、別説には、元平親王の子とされてもおります。経基王は、平将門の天慶の乱当時の武蔵介だった人物として知られております。その後、西国での藤原純友の乱では追捕の大将小野好古の次官として、豊後の国で賊の首領格の者を捕えたと記録にあります。

この経基王は、六孫王或は六孫王経基と言われ、邸は京都の左京、朱雀大路と八条の交わるあたりにありました。現在ここには六孫王神社が残されておりますが、なにしろ清和源氏発祥の地でもあり、その先祖を祀った社ですから、足利室町幕府や徳川幕府の尊崇厚く、貴重な古文書等も残されており、殊に元禄時代五代将軍徳川綱吉が再興にかなり力を入れております。六孫王神社縁起によれば、開基は応和年間（九六一―九六四）、経基王の子、源満仲によるものとされておりますので、大変古い御社であります。

ところで、この満仲には、系図には書きませんでしたが、多くの兄弟が居たようです。『尊卑分脈』によれば十二人と伝えます。その中には満政という武勇に優れた弟もおりましたし、検非違使をやっていた満季という弟も居りました。

満仲が名をあげたのは、安和の変という皇位争いのからんだ、藤原氏による醍醐源氏左大臣源高明追い落し事件に関係したことです。冷泉天皇の皇太子は、本来ならば実弟の為平親王がなるべきだったのでしょうが、賜姓源氏の勢力の増大を恐れ、その弟の守平親王が皇太子とされました。守平親王を皇太子からおろし、為平親王を皇太子とする計画が進んでいることを知った満仲は、これを朝廷に密告し、弟の満季は一味の藤原千晴という人物を逮捕しております。娘を為平親王の妻にだしていた

左大臣源高明は、当然失脚し、九州太宰府に流されることになります。

満仲は、こうしてＣＩＡ的な警察権力を背景として、のし上って行く訳です。

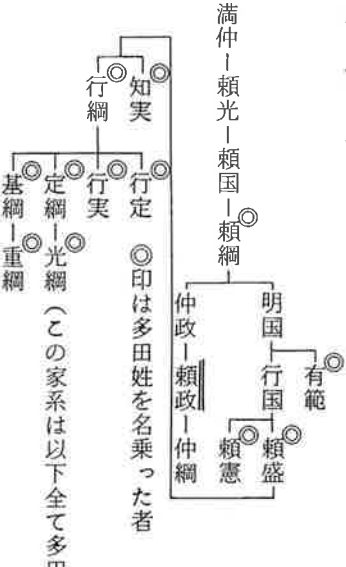
満仲には数人の子が居りますが、その中で、長男の頼光は摂津源氏の祖となり、頼親は大和守を三回経験して大和源氏の祖となり、三男の頼信は、河内国に根拠を置いて河内源氏の祖となるわけです。源頼朝は、後にふれますが、この河内源氏の子孫にあたります。

摂津多田の地（兵庫県川西市）が、何時満仲の手に入ったかはわかりませんが、多田院は天禄元年（九七〇）に、満仲により建立されました。「安和の変」が起きた翌年のことです。このあたりのことは、『多田院文書』や『帝王編年記』に書かれてあり、『川西市史』の史料編で見ることができる由です。多田神社（多田院）の建築物は、重文になっている程の古いもので、そこには、満仲、頼光の宗廟もあります。

満仲の長子頼光は、「ライコウ」と呼ばれ親しまれておりますが、例の大江山酒呑童子退治で有名です。その四天王の中には坂田金時（金太郎）が居たり、鬼の片腕を軌り落した渡辺綱が居たりして、話題の多い人物です。

次に、この頼光流の系図をあげておきます。

系図（その二・多田源氏）



ところで、満仲・頼光等の一族は、京の何処に住んでいたかというと、左京一条のあたりでした。この辺は、親王やら藤原道長等の一流人士の邸宅のあった所です。昔も今と変り無く、一流の住宅地は大変な地価だったことが知られております。古文書に、十世紀の後半のことですが、

「四条以北は、土地の値が高く、なかなか普通の者では買うことができない。」

とあります。してみれば、満仲一族は大変な財産家で

あったわけです。

これは、諸国の守を歴任して蓄財したものと思われますが、それだけでは説明のつかないものがあります。そこで考えられるのが、多田銀山の開発であります。この件につきましては、後述することにします。

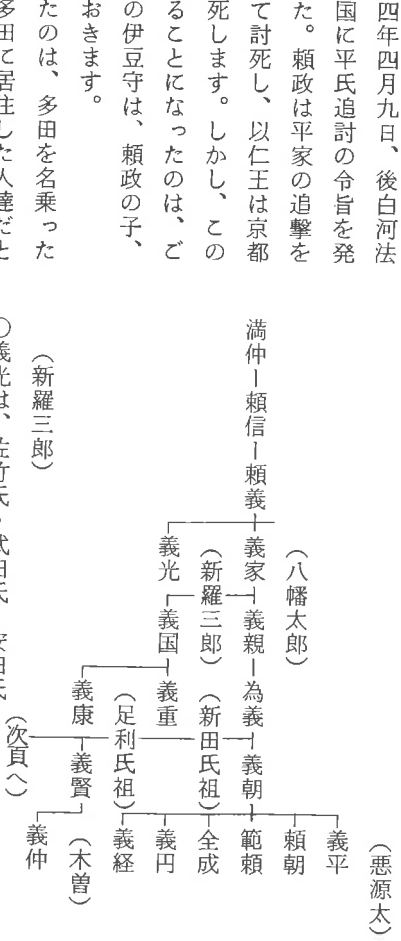
系図（その二）の中で、傍線を付した頼政は、有名な源三位頼政で、宮中に現れた「ヌエ」を、強弓をもって射殺したことは有名です。彼は平氏政権の専横に対し、かねてより憤っていたが、治承四年四月九日、後白河法皇の第二皇子以仁王を奉じ、全国に平氏追討の令旨を発します。頼政七十六才の時でした。頼政は平家の追撃を受け、宇治平等院のかたわらにて討死し、以仁王は京都府相楽郡光明山の鳥居の前で戦死します。しかし、この事件が伊豆の頼朝を立ち上らせることになったのは、ご存知のとおりです。なお、当時の伊豆守は、頼政の子、仲綱であったことを付け加えておきます。

系図で◎印をつけて置きましたのは、多田を名乗った人々ですが、この人々は恐らく多田に居住した人達だと思います。

四　河内源氏について

ここで、一寸頼信流の河内源氏について述べて置きます。この流は、その系統に有名な頼義・義家の父子があらわれ、武名を天下に轟かせますので、何時の間にか清和源氏の嫡流のように思われていますが、実際は多田源氏の方が嫡流なのです。次に頼信流の河内源氏の系図を簡略にしてあげておきます。

系図（その三・河内源氏）



○義光は、佐竹氏・武田氏・安田氏
平賀氏・大内氏の祖である。

（志田）
義憲
頼賢
為朝
（鎮西八郎）
行家
（新宮十郎）

ここのようにして考えれば、同じ清和源氏の流れであっても、頼朝の時代になれば、摂津多田源氏は、他人同様であって、鎌倉からは、多田源氏の経済力を如何にして入手するか、常時目をつけることになり、多田源氏側としては、それに対して如何に自衛するかが問題となって行きます。

五佐伯氏と鉱山開発

佐伯氏が大友氏に討たれたのは、その豊かな経済力に目をつけた大友義鑑が、佐伯氏の内紛に乗じたものと、私は考えます。この考え方は、『柵牟礼城風雲録』を読んでいるうちに考えついたものです。と言うのは、佐伯惟治公は、領内に多くの神社を勧請したようですが、その財源はどうしたのか、と考えた訳です。

当時では、恐らく莫大な資金が必要で、それを調達するには年貢しかないはずですが、それならば領民はたまったものではありません。惟治公は苛斂誅求の暴君見本として、後世に名を残したはずです。ところが惟治公はその後には、旧領内に神として祀られます。これは、悲運に倒れた惟治公を、単に祟り神として畏れただけでしょうか、私はそうは考えません。領内の人々が、惟治公に対し抱いていた親愛の情から、その死に対し心から同情したものと思われるのです。

領内の米の収穫は、恐らく四乃至五万石程度でしょうから、年貢は家臣団を養うのに精いっぱいだったと思います。これは、後世の毛利藩の状況を見ればわかります。副収入の海産物や木炭を考慮に入れても、たいしたことはありません。

そのように考えてくると、残りは鉱物資源にしぼられてきます。前述の『風雲録』に、惟治公の次の意の書がみえます。（同書八十一頁）。

「畑津並三郎左衛門尉の鉱物運搬車を塩月伊介持ちとし杢の持っている多々良（鉱物をとかす炉に風を送るフイ

ゴ）を、餅原監物兵衛につかわす」

この書が持つ意味は重要です。

惟治公が、このような指し図をしているところをみれば、他の家臣にもいろいろな鉱山冶金具を保管させていたことが推定されるのです。

工匠頭や人足頭に保管させるのではなく、武士に保管させたということは、どういう訳なのでしょうか。惟治公の書に見える餅原監物兵衛は、惟治公の重臣であります。このような保管のあり方は、非常に異例なことで、私は他にその例を知りません。

これは、生産手段と運搬手段の独占ということで、その鉱物が大変貴重なものであったことを物語っています。鉄や水銀などは、古墳時代以前から生産されており、領主が独占しても他国でどんどん生産されていますので、意味がありません。とするならば、金や銀の生産以外には無いはずです。

さて、現在山梨県塩山市の秩父山中で、武田信玄の隠し金山跡の学術調査が進められております。その金山の名は黒川金山です。これも鉱石処理の過程で、大量の水を要し、その水で谷川が黒く濁ったから黒川と名づけられたものでしょう。

ほぼ同時代と考えられるこの金山の、当時の技法を考えてみますと、まず、沢で砂金を見つけると、附近に金の鉱脈を探す。次に鉱脈を見つけたら、地中に走る金の鉱脈を追って掘り進む。当時、鉉延（つるのべ）とか、鍾追（ひおい）とか言った原始的な工法による坑道です。後世、佐渡金山で行なわれたような、排水坑や換気坑を考えて設計図を引いた寸甫切工法は、まだ行なわれていませんでした。

こうした工法ですから、沢筋に小さな坑道が多く掘られ、通常「たぬき穴」とか「たぬき掘り」とか言われます。換気やら排水やらの関係で、それ以上進めなくなると、その坑道は放棄されます。黒川金山では、三、四十メートル程度のようです。坑道の入口は、黒川金山では立派な石組で保護され、ひさし屋根がかけられていたようです。坑道は、高さ約一・二メートル、幅約五十センチメートルくらいのものです。

掘り出された鉱石は、石臼で砂粒くらいに砕かれます。が、その前に「くぼみ石」で粗く砕くという行程があります。「くぼみ石」や「石臼」は、こうした理由から相

当多数必要ですから、昔の鉱山跡にはこうしたものが多数残されています。

砂粒くらいに砕かれた鉱石は、底にムシロなどを敷いた樋に流し、水流で比重を利用した選別をするわけです。金銀は比重が重いので、樋の手前で沈澱します。この選鉱に、多量の水が必要ですが、この濁った水が川を汚し黒川とか黒沢とかの川を呼ぶ名になる訳です。

選鉱された沈澱物は、素焼きの陶器の「るつぼ」に移され、木炭を燃料として「フイゴ」で風を送り、金属を熔かしたものでしょう。要するに、つい先頃迄各地に見られた、村の鍛冶屋さんの少し大規模なものを想像すれば良いわけです。もっとも、燃料はコークスでなくて木炭、フイゴは手押しでなくて足踏み式の多々良です。炉には三方とか四方とかに多々良をとりつけ、多くの人間が、交替で精錬作業の終わる迄昼夜の別なく踏み続け、炉の状況を見る者、木炭を補給する者、作業員の交替を行ない、作業を監督する者、全搬の総指揮にあたる工場長格の人など、大変な人数が作業に従事して居りました。

採掘・選鉱・精錬に従事する多数の人々の生活はどうなっていたのでしょうか。山の斜面を段畑式に整地し、小屋が建てられます。家族持ちもいましたでしょうし、食事・水汲み・洗濯等の世話をする女衆もいたでしょう独身者のためには、女郎衆も来ていたかもしれません。

食糧・其の他の生活必需品の補給は、どうなっていたのでしょうか。黒川金山の場合、産金の期間は、案外短期間だったようですが、それでも一時は、黒川千軒といわれるほど賑った時期があったようです。

こうした小屋跡も手懸りになる訳です。今は山林になっていても、よく見れば整地の痕跡があったり、小屋跡がそのまま段畑になってしまい、農作業中に時として陶片やらボロボロになった刀子などの昔の日用雑品が出てくることもあります。

さて、佐伯氏の鉱山跡はどこでしょうか。地図を見ますと、青山の黒沢のほかに、直川の仁田原の奥にも黒沢という地名があります。私は、石神越から陸地峠に続く山嶺の北斜面の沢筋にあるのではないかと考えます。惟治公の古文書が、下堅田の泥谷に伝えられているところを見ると、宇目の鉱山ではないと思います。

もっとも宇目の鉱山発見も古く、惟治公の時代に既に稼業していたのかもしれません。宇目では木浦鉱山をは

じめ、古い鉱山もあり、銀・錫・鉛・銅・金等の産出がありました。

六　佐伯惟治公の不審な行動

佐伯惟治公が栂牟礼城を開城したのは、大永七年十月下旬か十一月初旬のことと考えられますが、亡くなったのは十一月二十五日ですから、その間、半カ月か二十日程の日々があったはずです。

この間の行動が、非常に難解です。開城の際、落去先も決めずに開城したとすれば、その行動は愚行そのもので、再起もできぬことになります。落去先は決めてあったが、それが何らかの理由で手違いが生じ、身動きのつかないことになった、というのが二番目に考えられることです。この二番目の理由が通説です。次に、まだ領内に止まって、再起を図る準備をする必要があったと考えるのが、三番目の考えで、私の新説です。

もとより、隣国日向の土持氏は佐伯氏の親戚ですから開城時から落去先は日向と決め、使者を走らせてあったと思います。ところが惟治公は、領内でまだしなければならぬことが残っていたのでしょう。船形の奥にしばらくひそみ、その処置をすることにしました。その作業は多忙をきわめますので、千代鶴丸は汐月城村に隠れさせておきました。人質にでもとられたら致命的になる我が子を、敢て、より大友軍に近い所に潜伏させなければならなかった惟治公の、船形に於ける仕事というのは何だったのでしょうか。

私は、鉱山の閉鎖湮滅が、その仕事だったと考えるのです。鉱山は、金山だったのか銀山だったのかわかりませんが、大友氏やそれに加担した同族に、そのまま渡すのは敵を利することになります。再起の場合は、又掘ればよいわけです。山道をたどる落去の困難な旅ですから携行できない重量のある貴重品は、坑道の中に納めたのでしょう。冬のことですから、坑口を破壊し、山土を崩して、上に枯れ草でもかけておけば、全くわからないことになります。翌年春がくれば、緑の草がなお完全に隠してくれることでしょう。

この時、鉱山の人夫達はどんな運命にあったでしょうか。鉱山の仕事は苛酷な仕事ですから、当時でも罪人達が主体であったと思いますが、事を秘匿する為、残酷にも全員斬り殺されたことと思います。

この推定は、惟治公の財源だった鉱山が何処にあったのか、全く判明しないことと、其の後船形の奥で、大友氏が鉱山を稼業したという伝えのないことも、その考えの中にあります。いま一つ、惟治公が、当初から西へ向う計画を全く持っていないことが気になるのです。私は若し西へ向えば、大友氏の追尾を受けて、鉱山が発見される場合があることを恐れ、敢て南に向うことにしたのだと思います。

こうして、鉱山の湮滅に日を送ったことが、惟治公の命取りになります。大友義鑑の日向土持氏に対する圧力や、臼杵長景の策謀により、国境はすべて封鎖されてしまいました。

七　まとめ

以上のように考えてきますと、すべて筋が通るような気がします。

豊後多田氏は、緒方惟栄と共に源義経に味方した多田源氏の末裔で、惟栄亡きあと、佐伯惟康に従って、多田氏は佐伯氏領内の鉱山経営にあたり、代々佐伯氏に重用されてきました。多田氏が鉱山経営について、特別の知識を持っていたのは、その本拠、摂津多田荘に於ける多田銀山経営の経験によるものでありました。

時代が下って、佐伯惟治公の柵牟礼籠城の時、多田七郎兵衛尉、弓勢をもって武名を挙げ、開城後は一族黒沢の奥に移り住んで、惟治公の再起に備えました。不運にも再興ならず、惟治公尾高知山に討死のこととなり、多田弥四郎種々苦心の末、船形に一寺を建て、定光寺と号し、娘若狭を出家させ、惟治公を富尾権現と祀り、その冥福を祈りました。

これが、私の推論であります。